

令和8年度秋田大学大学院医学系研究科  
医学専攻（博士課程）入学試験  
（2回目）

英 語

令和7年12月18日（木）（10:00～11:40）

試験終了後、解答用紙のみ提出してください。

監督者の指示があるまで問題を開かないでください。

問題用紙	4枚
解答用紙	3枚

I 以下の英文を読んで問いに日本語で答えなさい。

(本文省略)

(本文省略)

(本文省略)

# (本文省略)

<出典：Andrea Kane, “More young people are getting early-onset colorectal cancer. 5 things to know”, CNN Health, 2025, <https://edition.cnn.com/2025/10/16/health/early-onset-colorectal-cancer-wellness>, より抜粋, 一部改変>

問1 本文で述べられている若年発症癌に関する最近の傾向, 特徴に関して, 300字以内でまとめなさい。

問2 本文で述べられている「5 things to know」とは何か, 5つ挙げて各々を100字以内で説明しなさい。







令和8年度秋田大学大学院医学系研究科  
医学専攻（博士課程）入学試験（2回目）

英語

解答・解答例，配点

問1 本文で述べられている若年発症癌に関する最近の傾向，特徴に関して，300字以内でまとめなさい。

配点：50点

解答例：様々な研究によると，若年性がん（50歳未満で発症する疾患）の診断は増加傾向にある。そして若年性がんの中でも，大腸がんは上位を占めている。1990年代半ば以降，若年層における大腸がんおよび直腸がんの発生率は年間約2%ずつ増加しており，この傾向は米国だけでなく世界的に見られ，男女ともに発生している。若年性大腸がんはすでに米国において50歳未満の男性におけるがん死の主要原因となっており，この傾向が続けば，2030年までに50歳未満の女性におけるがん死の主要原因となるだろう。米国ではあらゆる年齢層において大腸がん症例と関連死亡数が数十年にわたり減少傾向にあり，その成功は治療法の進歩とスクリーニング促進に向けた公衆衛生の取り組みによるものだという。しかし50歳未満ではその恩恵が確認されていない。若年者の癌では，絶対的な患者数が比較的少ないことに加え，費用や出血・鎮静剤の合併症・偽陽性などのスクリーニングに伴うリスクなど，効果的な検診プログラム実施に関わる他の要因も考慮しなければならない。

問2 本文で述べられている「5 things to know」とは何か，5つ挙げて各々を100字以内で説明しなさい。

配点：1つにつき10点（計50点）

解答例：

- ① 大腸がんの初期症状を知ること，すなわち，若年層において最も顕著な初期症状が便に血が混じる現象であることを知ること，さらにその他の症状として体重減少，新たな下痢や便秘といった排便習慣の持続的な変化，便の細さ，腹痛が，疲労感が初期症状となりうること。
- ② 環境要因が疾患リスクを高めている可能性がある。遺伝子が30年でそれほど変化して原因となるはずがないので，若年性がん発生率の上昇要因は環境要因によるものと考えられる。環境要因としては，肥満，座りがちな生

活習慣，赤身肉・加工食品・添加糖・糖分入り飲料を多く含む食生活，肥満，マイクロプラスチックが考えられる。

- ③ 遺伝子検査が手がかりとなる可能性がある。若年期に癌と診断された患者はリンチ症候群や家族性大腸腺腫症などの遺伝性症候群と診断される確率が高く，癌と診断された若年患者全員に家族性遺伝子検査を実施すべきだ。
- ④ 若年患者はより困難な状況に直面する可能性がある。若年患者は一般的に健康状態が良好である。高齢患者と比べ，より高用量・多サイクルの化学療法に耐えられる可能性が高く，手術や放射線治療もより頻繁に受けられる。しかし，生存率が必ずしも高齢患者より優れているわけではない。
- ⑤ 検診を受けよう。リスクレベルに応じた適切な年齢での検診が重要であり，平均リスクなら 45 歳，家族歴がある場合はそれより早い時期に受ける。